「京大生」の立場は、自分の努力だけで得たものではない…

大学受験に至る前に厳然とある「生まれ」による教育格差

9/21(土) 17:21
岡邊 健
（JBpress 2024.10.6）

京都大・吉田キャンパスの時計台と新城元総長の像。教育格差を考える一連の授業を終え、京大生たちは何を学んだか

生まれという初期条件によってもたらされる「教育格差」。ここにスポットライトを当てた京都大 1 年生の授業が、2024 年度前期に開かれた。高校までの日常・学校生活を振り返り、そこに潜む教育格差の存在に気づくことで、京大生たちは何を学んだか。全 8 回にわたる連載の最後となる今回は、京大生たちが授業を通して得た気づきについて振り返った。学生たちのディスカッションを「実況中継」風に紹介する。

【表】京都大 1 年生の授業「教育格差を考える」を受講した 15 人の学生たちの属性。両親のうち、1 人でも「大卒」なのは 14 人に上る。（岡邊 健:京都大学大学院教育学研究科教授）

「京大生、教育格差を考える」受講生の属性					
両親大卒	京都府	女	父大卒／母短大卒	東京都	女
両親大卒	静岡県	女	父大卒／母高卒	大阪府	女
両親大卒	大阪府	女	父大卒／母高卒	長崎県	男
両親大卒	静岡県	男	父高卒／母短大卒	広島県	男
両親大卒	愛知県	男	両親高卒	大阪府	男
両親大卒	愛知県	男	父未回答／母大卒	京都府	男
両親大卒	滋賀県	男	父未回答／母大卒	大阪府	男
父高専卒／母大卒	海外	女			
※ 未回答は「答えたくない／わからない／いない」を選択した人					

■　教育格差を学び、実践にどう生かすか

「教育格差を考える」第４講では、教科書『現場で使える教育社会学――教職のための「教育格差」入門』を用いて学んできた内容の振り返りを行った。お題は次の通りであった。

（A）「生まれ」に可能性を制限されない社会をつくるために、人々が知るべき理論、データ、研究成果はなんだと思いますか。教科書全体から３つ選び、それぞれの理由を論じてください。

（B）この授業で学んだ理論、データ、研究成果を、どのように自分自身の日々の生活や人生に応用できると思いますか。

平均的にいえば、SES（親の職業・学歴・収入などで構成される社会経済的地位）の高い家庭で育ってきた京大生たち。彼らは皆、真剣に「お題」に向き合った。ご覧いただこう。

■　“平等な入試”の前に隠された不公平

岡邊　：　さて、ほかにはどんな議論がありました？

しゅんすけ　：　ゆうだい君が Discord に書いてた平等と公平についてが、僕は面白いなと思って。例えば受験とかで点数が客観的に付けられて、点数が一定基準を超えた人は合格、超えなかった人は不合格って、形式的にはすごい平等だと思うんですけど、この授業で、教育社会学の知識を学んだことによって、形式的平等の裏には、そこに到達するまでのさまざまな不公平が隠されてるっていうことが分かって。

努力でさえもそういうことがあるっていうのが分かったのが、すごい有意義だったなって思います。

けんた　：　入学試験の平等っていうところで、女子枠を京大で導入するってなった時に「逆に男子を差別してるんじゃないのか」「受験は性別関係なく、平等なんじゃないのか」みたいな意見もあったと思うんです。

でも、受験を受ける前の段階で、やっぱり女性は不利を被っているのが、事実。「男子差別なんじゃないのか」っていう意見の中には、女子のそういう現状を知らず、「男女は平等だ」という思い込みから来てるのも、一定数は存在すると思う。

やっぱり人々が、そういう現状を知らないと、格差を埋めるための政策方針が受け入れられづらい。アファーマティブ・アクションが差別だと捉えられてしまうと思いました。

■　ジェンダーを知ることは日常生活に役立つ

　ひろと　：　ジェンダーは、大人が知っておかないと、子どもにも植え付けてしまうのにつながっちゃうなと思ったので、大切。
　お題 B につながるんですけど、自分の思い込みとか偏見とかが思ったよりあって…。子どもに教育していく際、大人がそれを子どもに植え付けてしまうようなことが起こってしまい得るので、こういう（ジェンダーに関する）データとかを知っていれば、「自分の思ってたのと違うんだな」って気づけて、活用できるんじゃないかなって思いました。

　岡邊　：　将来、子どもを持った時の話ですね。あるいは、もっと広く考えてもいいんじゃないですかね。例えば職場での同僚、後輩との関係の中で、ジェンダーの問題で、さまざまな情報を知ってることによって、物事が解決する、あるいは円滑な人間関係が促進されるみたいなことって、きっとあると思うんだよね。皆さんの普段の日常生活、友人関係みたいなことも含めてあるかもしれない。

■　数学のようには答えが出ない「格差の解決策」

　岡邊　：　さて、皆さんは、もともとこの授業を、シラバスの情報で受講してくれたはずなんだけど、授業を受ける前と受けたあとの今日の時点で、「教育格差」という語の受け止め方に、違いはありますか？

　ゆうだい　：　自分の班で話があったんですけど、自分は、教育格差を知りたいなと思ったのと同時に、「こういう解決策がある」というのを知れるんじゃないかなって思って、参加したんです。　　でも、教科書のどの章も、いろんな二項対立があって、たとえば、いじめを受けた側に対するサポートを考えると、今度はいじめをしちゃった側に対してサポートが薄いんじゃないかっていう…。

　どの問題でも、簡単に解決策は出ないっていうのを自分は感じて…。自分は教育学部ですが、たぶんどの研究テーマでも、数学みたいに答えがパンって出るようなものは、ひとつもない。どこをどう調べたとしても、いろんな要素が絡まってて、それをひとつひとつ分けていきながら多角的に考えるのが、研究に必要な姿勢なのだと、この授業で自分は学べたんじゃないか。

■　許容してよい格差、してはならない格差がある

しゅんすけ　：　格差っていう言葉は曖昧すぎて、じゃあ「何が格差で、何が格差じゃないのか」、「この問題は格差なのか」とか、そういう話になる。

教育社会学の知見を用いて、社会の構造を分析することで、ある程度、問題意識だったり、観察の視点だったりを明確化できると思うので、そういう意味で、この教科書と授業は役に立つと思いました。

岡邊　：　一言付け加えると、格差にも許容できるもの、できないもの、あるいは許容しても良い格差、してはならない格差って、あると思ってて、ここは万人が一致してるわけじゃないです。

つまり、問題意識の持ち方によって、あるいは前提の置き方によって、このあたりは変わってきます。多くの人が「こういう格差はなくしたほうがいいね」っていうの、あるかもしれませんが、そうじゃない格差も、教科書の中では紹介されていたと思います。その場合、議論は分かれるんだけども、じゃあ「どういう議論の分かれ方があるか」っていうのが、この授業でやった中身だったと思ってください。

■　家庭の問題にも学校は関われる

ももか　：　自分では教育格差って、いわゆる学力だけしか考えていなくて、それで受講を申し込んだんですけど、この授業を通して、教育格差といっても、学力だけじゃなくて、進路だったり、文化資本とか、その他いろいろあるっていうのが分かった。

もう一つ、学んだなかで、「学校のプラットフォーム化」っていう発想が面白いなって思ってて。学校内での格差は、頑張れば是正できるかもしれないんですけど、家庭まで踏み込むのって、なかなか難しいと思ってたんです。家庭って、閉じられた空間で、子どもに対して一番影響力のある環境。

私がイメージしたのは、高校生の時『タコピーの原罪』っていうマンガで、親の行動によって子どもの可能性、性格、生活、全てが制限されるっていう話。　あの漫画でもあったように、家庭には他の人は介入しづらいし、そもそもなかなか問題があると気付かれない。

授業で、スクールソーシャルワーカーが介在する、学校をプラットフォーム化するっていう形で、解決策は存在するっていうのが分かったのは、自分の学びの上で大きいと思った、と同時に、このスクールソーシャルワーカー、あんまり使われてないっていう現状も知ったので、そこは改善されるべきだと思いました。

岡邊　：　学校は、場合によってはネガティブに作用するんだけど、状況の改善に寄与する例もたくさんある、スクールソーシャルワーカーの話は、その具体の一つです。その漫画、もう一回教えてもらっていいかな？　　ももか:『タコピーの原罪』です。　　岡邊:勉強しときます。おっと、時間、すぎてますね。名残惜しいですが、これで終わりにしましょう。皆さんが、充実した大学生活を送ることを祈っています。

以下、第４講を終えて提出された「授業後レポート」から、一部を抜粋して紹介する。

■　「高校までの自分の視野は本当に狭かった」

【授業後レポート（本授業全体の振り返り）】

女性　：　これまで当たり前に思っていたことを疑うようになった。特に隠れたカリキュラムについては衝撃的で、学校生活で当たり前におもっていたことがそうではないことを実感した。
一方で、隠れたカリキュラムによって、社会全体がこれだけ影響を受けるならば、逆に、学校教育を変えることが有効な手段であると考えることもでき、学校教育によって未来を良い方向に進めることができると希望が持てた。

女性　：　授業全体を通して、安易に想像がつくような教育格差から思いもよらなかった教育格差まで様々なものを学び、高校までの自分の視野は本当に狭かったのだなと感じた。
地方に学校や塾を増やす、などといった対策はすぐに実現できるものではないが、インターネットやSNSが発達した今の時代だからこそ、情報格差は埋めやすいと思う。

男性　：　長い間高校を受験のための場所として使ってきた（通ってきた）自分にとっては、いかに自分が特異な状況下におかれ、恵まれた環境に身を置いていたか、改めて気づかされた。
京都大学に進学する人のほとんどは恵まれた環境で育ってきた人であるはずのため、その観点からも京都大学で教育社会学を学ぶことは、存在する格差から目を背けて、努力主義だけで結果を決めつけるという風潮を断ち切るのに、効果的だと感じた。

■　「努力できる」環境にいることに気づいた

女性　：　私自身、生まれにかかわらず努力すれば良いと思っていた節があったので、「努力格差」の概念を知り、自分の偏見に気づかされた。
私が偏見を持っていた理由は、高校・大学と進学していく中で、似たような SES の人としか関わる機会がなかったからだと思う。トラッキングによる学校間の SES 格差や非行少年の話などから、自分の見てきた世界がいかに偏ったものであったかを実感することができた。

女性　：　今までは、勉強のやる気がないことや学校生活に積極的でないことは個人の性質によるものと思っていたが、育った環境や周囲にいる大人の影響も大きいのだと知った。しかも、SES の違いは、単に経済的な問題にとどまらず、子供が得られる文化的な経験にも響いていることが分かった。
様々なことを学んだ今、かえって自分と異なる他者に対してラベリングをしてしまわないように気を付けなければならないと思う。安易に「こういう環境で育ったから～なのだ」と考えるだけでは、今までの自分の思考と変わらなくなってしまう。

■　学校が持つ、教育格差を緩和するポテンシャリティ

この授業を京大新入生に向けて開講した趣旨は、連載第 2 回で詳述した。授業後レポートからもわかるように、受講した学生たちは、自分たちが「生まれ」による有利さを持っていること、そして、いまのポジションは自分の努力のみで獲得したものではないことに、気づいたようだった。

本連載を終えるにあたって、最後にあらためて言及しておきたいことがある。それは、学校はけっして、格差を助長するだけの存在ではないということだ。　筆者はこの連載のなかで、「『階層の再生産』に一役買っている高校制度」（第 2 回）や「地方進学校の『地元国立大志向』が教育格差を生み出す」（第 4 回）などの表現を用いて、学校が教育格差を再生産する構造に、批判的に言及してきた。
しかしながら、授業で用いた教科書『現場で使える教育社会学――教職のための「教育格差」入門』では、学校の持つ教育格差を緩和するポテンシャリティにも、紙幅が割かれている。 たとえば、ももかが第 4 講の議論において言及していた「学校プラットフォーム」構想は、学校を子どもの貧困問題の改善に資する拠点とする政策パッケージであり、政府の「こども大綱」（2023 年）のなかに位置づけられている。

この例もそうだが、理念に見合うだけの財政措置が伴っていないことなど、課題は多々ある。ただ、条件整備のしかたしだいで、教育は「社会を悪い意味で維持する」装置にも「社会を変える」装置にもなり得るのだ。このことを、最後に強調しておきたい 。（連載・完）

※授業のレコーディングや文字起こしの確認は、ティーチングアシスタントの重定みのりさん（京都大学大学院）が担ってくれた。本連載は彼女、そして受講してくれた 15 名の学生がいなければ成立しなかった。記して、感謝の意を表します。

岡邊 健（おかべ・たけし）

京都大学大学院教育学研究科教授。1998 年、東京大学教育学部卒。博士（社会学）。警察庁科学警察研究所、山口大学を経て、2017 年より京大大学院准教授。2021 年、同教授。専門は犯罪社会学・教育社会学。『犯罪・非行からの離脱』（編著、ミネルヴァ書房）、『犯罪・非行の社会学〔補訂版〕』（編著、有斐閣）、『現代日本の少年非行』（現代人文社）など著書多数（※amazon 著者ページ）。現在、青少年問題学会会長。